

物遊びのすすめ ● -できるかな?-

お子さんが成長していく姿を見るのは楽しいことです。ただし、毎日少しずつ変わるので、変化に気づかないこともあります。久しぶりに昔のビデオや写真を見返して、あの頃はこうだったんだ!とびっくりすることもあると思います。

子どもの成長を実感するための、ちょっとした工夫を紹介します。子どもは、おとなが考える常識とはちょっと違うかんじで、周囲の世界を見ているようです。たとえば、目の前のおもちゃを布で隠すと、赤ちゃんはおもちゃが消えてしまったかのように探さなくなります。布をどかしておもちゃを取り出せるようになるのは、生後6~8か月頃だといわれています。

1歳頃になって、四角い積木をつめるようになったお子さんに、円柱形や三角形の積木を混ぜて渡してみてください。円柱形の積木は、丸い面を避けてつむことができるでしょう。ところが、三角形の積木は、斜めになっていてもすべてが平面なので、向

きの違いがわかりにくいのか、2~3歳からでないとき向きを変えてしっかりつむのは難しいようです。

時間をみつけて「こんなのできるかな?」と子どもに向き合ってみて、問いかけてみれば、その時々のおもしろい答えが返ってくるでしょう。興味のある方は下記の本などを参考にしてみてください。

●「日曜ピアジェ 赤ちゃん学のすすめ」開 一夫(著) 岩波科学ライブラリー



お料理レシピ ● 桃の節句

旧暦の3月3日は桃の季節で、不老長寿を与える植物と考えられ、百歳(ももとせ)まで長生きできるという意味があります。また、邪気を祓う力のある桃には鬼(邪気の象徴)を退治する力もあると考えられ、桃から生まれた桃太郎が鬼退治をする民話が誕生しました。こうしてみると、3月3日は女の子だけでなく、人々の幸せを願う節目の日であるといえます。健康で幸せな日々を願う日として、家族でひな祭りを楽しんでください。



**材料** ●●●  
市販のちらし寿司の素、ご飯適量、卵適量、アスパラ、きゅうり、人参、きぬさや、ハム、チーズ等  
**作り方** ●●●  
①市販のちらし寿司の素を熱いご飯に混ぜる。  
②卵を溶き、薄焼き卵を作って、細く切り、錦糸卵を作る。  
③ゼリー型に寿司飯を少し押しながら詰め、皿にひっくり返す。  
④上から、きゅうり、花形や星型に型抜きしたゆで人参、ハム、チーズなど好みの具材でかわいらしく飾る。



**材料** ●●● 4人分  
コンソメ顆粒 小さじ2、湯 200cc、卵 2個、牛乳 200cc、こしょう 少々 **【具材】** アスパラガス 4本、しめじ 1/2パック、ハム 4枚  
**作り方** ●●●  
①顆粒コンソメをお湯で溶き、粗熱をとっておく。  
②コンソメスープの入ったボウルに卵を割り入れ、泡立えないよう気をつけながらよく混ぜ合わせる。  
③アスパラはゆでて斜め切りに、しめじは石突をのぞき手でほぐす。ハムはお花などの型を使ってかわいく型抜きにする。型抜きで余った部分はみじん切りにする。  
④型抜きしたハムを数枚最後の飾り付け用に残して、その他の具材と卵液を器に入れ、蒸し器で蒸す(途中、沸騰させないように中火で)。  
⑤蒸しあがったら、飾りのハムを飾る。  
●濱島啓子さん提供のレシピを参考にしています。  
<http://allabout.co.jp/gm/gc/5847/>

管理栄養士でもある岡本秀己さん(滋賀県立大学人間文化学部)と岡本ゼミの学生のみなさんに紹介いただきました。



**材料** ●●● 6個分  
道明寺粉 150g、水 300cc、砂糖 70g、つぶあん(市販) 240g、食紅 少々、桜の葉塩漬け 6枚(子どもが嫌いなら無くてよい)  
**作り方** ●●●  
①耐熱ボール(無ければ丼で可)に、道明寺粉と水の半量(150cc)を入れて、ひと混ぜし、5分間置いてから、ラップをし、電子レンジに6分かける。  
②残りの水150ccと砂糖を鍋にいれ、煮立てたものを①に加え、再度ラップをして、電子レンジで6分加熱し、そのまま、10分置いて蒸らす。  
③食紅を少量、水で溶き、②に加えて、桜色に染める。  
④つぶあんを6等分して、丸めておく。  
⑤桜の葉を洗って、水気を拭いておく。  
⑥②の生地を6等分し、手のひらに丸く広げ、あんをのせて包み込み、桜の葉で包む。子供用には食紅で目を入れ、耳を作ってウサギにする。

うみかぜだより 2010.2.20 第7号



こんにちは!  
「うみかぜだより」です♪♪♪

うみかぜだより1号の「世界の子育てコーナー」でとりあげた国オランダは、1993年5月末からの半年間、筆者が初めての海外生活を送ったところでもあります。当時保育園年長組だった息子を同伴するには、日中に彼が過ごせる場が必要でした。出発前から現地の人と連絡をとりあって探したところ、住まいの近くの小学校の1年生クラスに編入させてもらうことができました。オランダは5歳からの義務教育なので、息子にとっては1歳年少のクラスメートとなりますが、ことばの問題を考えるとこのクラスがよいだろうとのことでした。ただ、母親たる筆者の研修先施設での業務は夕方まであります。放課後をどうするのか。これが日本なら大きな問題となることでした。ところが、オランダでは何の困難もなく、学校近くの学童保育所に入所することができました。市が運営に関与している学童保育所で、学校が終わるころに指導員が学校まで迎えに来て、夕方6時ころまで預かってもらえました。というわけで、毎朝、オランダ式に少しの量のサンドイッチと飲み物のお弁当を持たせれば、夕方まで安心して自分の仕事に精を出すことができました。学校が夏休みになると、朝から学童保育所に通いました。また、サマープログラムというのか、夏休み中のある期間は森の中での活動が取り組まれました。連日自転車をこぎこぎ、森の中のバンガローに場を移した学童保育所に送っていったものです。もちろん、息子は苦労したことでしょう。いきなりことばの通じない教室に放り込まれての初めての「勉強」、さ

らに異国の見知らぬ大人のお迎えで学童保育所に通い、夕方まで過ごす日々……。小学校の先生によると、はじめの3日間は無言で過ごし、そしてその後、一言、二言と少しずつことばが増えていったそうです。そしていつの間にか、学校でも近所でもオランダ語でそれなりにコミュニケーションできるようになりました。休日にはかくれんぼに興じあう友だちもできました。(ちなみに、大学生となった今、オランダ語はすっかり忘れていくようです。)

さて、名残惜しくも11月に帰国し、翌春は日本での新入学でした。当時、息子の入学した小学校には学童保育所が設置されておらず、別の小学校の学童保育所に通うほかありませんでした。1年生の足で40分の道のりを一人歩きで通わせたことについては、何よりも無事にその期間がすぎたことを幸運だったと思います。同時に、随分かわいそうな目にあわせたなあ、と心が痛みます。現在の滋賀県では、ほぼ9割の小学校区に学童保育所が設置されています。小学校の空き教室利用という形態も残っていますが、独立した建物に諸設備もととのった学童保育所も多くなりました。指導員の方々の創意工夫により、子どもたちの活動も多様に支援されているようです。

最近の学童保育の充実を喜ぶとともに、外国から親に連れられてやってきた子どもでも、学校に、学童保育所に、あたりまえのように受け入れられて友だちづくりができる、この地域の子育て環境がさらにそのように整っていくことを願います。

ミニ学習会

とき 3月12日(金) 13:30~15:00  
ところ 滋賀県立大学交流センター2F 研修室7・8

「発達障害って何?」をテーマに皆さんと話し合います。7月にも同じテーマで開催しましたが、「時間が足りない」「第2弾をぜひ!」という声をいただきました。みなさんとさまざまな疑問を出しあい、「発達障害」について学びあう場とします。ご参加をお待ちしています♪

連絡先/子育て応援ラボ「うみかぜ」●tel.090-7343-2405●E-mail usp-umikaze@nifty.com●URL <http://umikaze.sub.jp/>

インファンクラブ演奏会

とき 3月26日(金) 11:00~11:30  
ところ 滋賀県立大学交流センター2F 研修室7・8

滋賀県立大学の吹奏学部による演奏会を行ないます。さまざまな音のする楽器を見たり、生の演奏に触れたりする機会を持ちたいと企画しました。子どもたちが思わず歌ってしまいたくなるような曲を検討中♪みなさん、お誘い合わせのうえご参加ください。

うみかぜだより 第7号

発行 子育て応援ラボ「うみかぜ」(竹下秀子研究室内) 彦根市八坂町2500 滋賀県立大学人間文化学部 tel.090-7343-2405 fax 0749-26-7235  
編集 上野有理・竹下秀子・林美里・広田幸子・丸澤由美子

## 「ぼく」「わたし」の世界が始まる

### 自分たちでトラブルを解決できる

4歳後半から5歳になると、相手の考えが想像できるようになり、共感したり、思いやる力も伸びてきます。自分と人との違いを知り、その人を理解しようとし、力づくではなく話し合っ



合って解決しようとしています。状況を客観的に見たり、相手を理解する力が伸びてくるので、おとなの助けがあれば、自分たちでトラブルを解決できるようになります。このとき、おとなは仕切るのではなくサポート役に徹すること。子ども同士が自らかかわりあう姿を見守りましょう。

また、この時期はできる子に対する嫉妬の感情も出てきます。遊ぶときや何かをさせるときには、競争にならないような配慮が大切です。引き続き、子どもの感情を受けとめ、素直に表現させ、自尊心を育てていきましょう。そして、友だちと共に喜び、共に悲しむことのできる力を育てていきましょう。

### 知りたいときが教えどき

最近、6歳くらいになると、ほとんどの子がひらがなを読めるようになっていますが、文字や数は、知りたいときが教えどきです。基礎的能力が育ってくると苦勞なく覚えられます。例えば、「さ」と「ち」は下半分が左に曲がるか、右に曲がるかを見分ける力がりますが、その見分ける力というのは上下・左右がわかるということです。それは、自分のからだの真ん中を中心にして、からだの上



下・左右を区別できる力が基礎になります。文字を書くときには、背中をまっすくにして、腕や手首、細かい指先の動きが必要です。日常生活や遊びを通じて、それらの動きが育っていきます。

### 日常生活のほとんどをひとりできる

ほとんどの子どもが5、6歳までに食事や排泄、衣服の着脱といった日常生活が自分ひとりでできるようになります。おとなと同じような正確さ、スピードでできるようになるのは、7歳前後だといわれています。この時期に世界中の子どもたちが学校(集団)教育を受けるようになっているのは、これまでの子育ての経験の中から導きだされたことなのでしょう。



しかし、心拍や体温調節、消化管の働きを調節する自律神経系の働きはまだ未完成ですので、朝起きたときに吐き気や腹痛などがみられることがあります。このような症状への対策として自律神経の働きを調整する睡眠を十分とることがとても重要です。生活リズムを整えるということをお大切にしたいですね。

### 「困った子」は「困っている子」

「困った子」は、本当は「困っている子」です。中枢神経系の不具合があって、周りの人が理解できない行動として出ている子もいます。その子は周りの人の理解と手助けを必要としています。その子のペースに寄り添いながら「大丈夫。ゆっくりでいいよ」と付き合っていくことが、生きていく力を育てることにつながります。周りを意識して走らせないことです。どの子もそのまま価値ある存在なのだと思えとめることがいい親子関係をつくり、その子の自尊心や生きる力を育てていくのではないのでしょうか。

●参考文献 『はじめて出会う育児の百科』 汐見稔幸・榎原洋一・中川信子(著)、小学館(出版)

### 手遊び

#### パンやさんにおかきもの

作詞:佐倉智子  
作曲:おざわたつゆき  
編曲:植田光子



パンパンパンやさんでおかきもの  
サンドイッチに メロンパン ねじりドーナツ  
パンのみみ チョコパンひとつくたさいな  
はい どうぞ

お子さんの身体をはさんだり、ねじったりするふれあい遊びです。初めは顔をギューとはさまれたり、目や耳を引っ張られたり、鼻をつままれたりするの、"いや〜"と逃げたいこうとする子どもたちも「チョコパンひとつ〜」でコチョコチョされると、声を出して大喜び♪ 何度も何度もお母さんの手を自分の身体に持っていき、「もっとやって〜!」とアピールします。繰り返し遊んでいくうちに「チョコ〜」のフレーズで笑い声が広がります。コチョコチョされるのを期待して待ったり、笑いをこらえようとして、でも我慢できずにふきだしたり、わざとお母さんから逃げてコチョコチョをさせまいと作戦をねったりと、子どもたちはお母さんとのふれあい遊びをとっても楽しみます。また、幼児期になると「チョコ〜」のフレーズが始まると同時に、子どもがお母さんにコチョコチョをしたりする場面もみられます。子どもは「くすぐったい?」とお母さんに聞き、「くすぐったい! やめて〜」と応えてもらうと大満足の笑顔です。

まだまだ寒く、家で過ごすことが多い季節。子どもと一緒にコチョコチョしあって、温まるのもいいかもしれませぬね♪



モンゴルでは、幼い子どもを連れていく人がいても、それがその人の子どもだとはいえません。親戚の叔父さんや実の兄のことは「アハー(お兄ちゃん)」、叔母さんや実の姉のことは「エグチエー(お姉ちゃん)」と呼びます。年下の親戚や実の弟・妹も単語としての区別はないので、聞いてみないことには本当の兄弟姉妹なのか分からないほど、親戚・家族の仲が良いのです。ところが不思議なことに、モンゴルの遊牧民はいわゆる大家族で暮らしていません。遊牧民の移動式住居ゲルは、基本的に核家族が暮らしています。そして、核家族のゲル同士が2、3軒組み合わさって、遊牧の仕事を一括しています。その組み合わせは、親戚同士や友人同士ですが、季節移動のたびに変わります。また、ゲルには通りすがりのお客さんや近所の人々もよく出入りします。そんなモンゴルの家庭では、赤ちゃんや幼い子どもは人気者。家族問わずみんなが声をかけたり、一緒に遊んだりして可愛がり面倒をみます。家事の手伝いや子ども世話をすることによって、子どもたちも自分自身で学びながら成長しているんですね。

「子どもは馬の上で育つ」これは、モンゴル遊牧民の子育てについての慣用表現です。事実、遊牧民の子どもたちは、幼い頃から馬に乗って遊牧の仕事をしたり、乳搾りや家畜の世話を手伝います。子どもは重要な働き手であり、食事の支度も子どもの仕事です。きょうだいで分担して毎日の食事当番を決めたりして、12、13才から一人で食事を作ることも当たり前。たまにお母さんがつくることがあっても、子どもにも調味料の分量を確認するほどです。もちろん、子どもが小さい頃はお母さんが食事の支度をするのですが、子どもは成長するにつれて手伝ったり、一緒に作るようになり、いつの間にか子どもだけで出来る様になっていることが多いです。料理に限らず、洗いや幼い子ども世話をすることも上手。尊敬するお父さんお母さんの言うことを聞き、家の仕事を上手にこなしているのです。

どこまでも広がる草原に、浮かび上がる白いゲル。家畜たちと共に、つましくも力強く生きていく遊牧民は、今日もさっそうと馬を走らせています。私たち日本人と同じルーツをもつと言われるモンゴル人が住むのは、遠いように思えて、実は意外と近い国。そんなモンゴルの遊牧民の子育てについて、現地に留学経験のある東郷美香さん(滋賀県立大学・地域文化学研究所)にご紹介いただきます。

## 世界の子育て ——モンゴル——

### はたらく子ども